

木といふ木にからみしげりし烏瓜に赤き實一
つならぬなりけり

秋ふけてはづかに咲ける萩の花つちにしだれ
てかつ散りにけり

吹く風にゆらぎさゆらぐ草の枝は日光を纏め
やがてしづもる

障子のなる音きゝてゐるわれやあはれなるか
な心うつろなり

おもふらくこの夕かげになる庭はほろびの色
といはざるべからず

今宵は秋のなかばになれるなり空に雲だにあ
らすなりたり

落葉

さ庭にほべに満みちてちりくる木こ葉はには早はや櫻さくらの葉はま
じりてあらず

逸いら早はやくちりし櫻さくらの落らく葉はは枝えだにのこらず散ちり過す
ぎにけり

稻いなの目めのあくるにおそきあたりかも疾はや風かぜにま
じり時とき雨あめふり來きぬ

風かぜ曇くもりおほほに見みゆる朝あさ空ぞらにうなかぶしゆる
常とこ盤ばん木ぎあはれ

古里ふるさとに祖父ぢぢ祖母ばばませや歳とし月つきをい活くるに追おはれ
沙汰さたも通かはさす

眞幸まきといのり申ませご神業かみやのかなはぬ世よには術すべ
もすべなき

病やみたまひたのみ少すくくなりたまふ來きたれ來きたれと
告つぐる文ふみこれ

七十なご路ぢをいたく越こえさす老おいいの身みも堪たへてあ
りへよこの荒あき風かぜに

離はな磯いそのみもとをはなれ今け朝あわれや心こころをとゝの
へみけしきをおもふ

かはたれのおぼろおぼろに見みるものは風かぜにゆ
らびく白しろ菊きくの花はな

いづちむきわれやおもはむ死にいそぐ人の面影空しくはうつり

鳥自物つばさはもたす遠ければ見舞ひ申さむ
時過ぐべからず

或は今朝に空しくなりましけむ心のゆらびき
たへがたく感ず

幾年をさかり申して親々のみ墓へ荒くせさせ
まをしき

柞葉の母をうましゝ祖父も空しく空しくなり
まさむとす

犀川の橋をわたりてゆかむ時益良夫われも袖
ひぢぬらさむ

歌會詠

瓶びんに咲さく撫なで子この花はなの一片ひと萎なえてくれなわの色いろ
 褪あせにけるかも

含たこもりひらかんとする睡蓮すいれんの花はなは卷ま葉はの中なか
 に浮うきたり(以上自然詩社六月歌會)

雨あめ過すぎし夏なつ野のを來きつゝ桑くわの葉はのそよぐを見みれ
 ば山やませまりたり(七月八王寺歌會)

秋あきづきて草くさ蔭かげ荒あくなりにけり咲さきあるものは
 女を郎に花しの花はな

蒲の花かなしくも咲き池の端に夕べ明るき日
 かげさしたり

崖の上に生ひて靡ける秋萩の裏葉は白しこの
 夕風に (以上九月自然詩社歌會)

二子山つばらに見えて朝雲のあはただしかも
 峯にたなびく

足柄の山の紅葉こちごちに下照るいろのいや
 めづらしき

草山の朱づく色は露霜のふり置くごとにいや
 しき句はむ

富士ヶ嶺のふもとにかけて今朝ふりし雪てり
 をれり眼にかがよひ

さねさし相模の山につぎて並ぶ幾山山のもみ
ちのいろ見ゆ

標葉のらてはの黄葉あみぢつゞける柴山しばに人ひとかよふ見ゆさぶ
しきみちを(以上濱松歌會)

下
卷

大正四年晩夏より五年
初春にかけて詠ひしもの
を例にして題みたり。

み じ み と 見^み あ げ あ り し に
こ れ や こ の 空^{そら} の い ろ を ば 見^み た り け り 斯^あ く も し

原
の
中

葉と葉ふれ葉と葉すれあひ葉と葉ゆるゝ跳め
 てあるに不恰しきは木よ

風と共にさつと鳴りたる木々の葉の静みしあ
 とは何かさぶしき

これはこれ細しきものは木の葉なりほのぼの
 として光を透す

おもしろし地に生れしものなればここを動か
 す木々は年経ぬ

汽車の煙とほく人家と木の上になびきて白く
 晝は久しき

天地のひらけし時ゆ五穀みのりあなさびしも
 よ人は畑打つ

畑中に肥桶かつぎ人ひとりなにかさぶしく動うごき
あつるかも

天地のしたしき原に人のいでて春來はるきにけりと
畑はたけうつ見ゆ

野の家

新年しんねんの新年しんねん日ひ來きにけりと長なが寝ねよりさめてぞ一人ひとり
酒さけ瓶びんの酒さけのむ(元旦五首)

酒瓶さかづきの酒祝いざなひぎ飲のみすればうれしかも己おのれここま
で生いきて來きにけり

妻つま子こもち兒こははや育またち三さんつとなるおのれ三さん十じゅう
路ぢにまだ入いらぬなり

ひとりごち酒瓶さかづきをのみほす新玉あたらたまの年としの緒いとなが
く清きよけくゆけこそ

不二ふじの山やま今日けふこそ見みむと見みけるかも野のをはろ
ばろに不二ふじの山居やまつ

かんかんと外面とらへの道みちも凍こほりたり寝いねむと妻つまのの
べし夜よの床とこ (寒夜三首)

貧まいしきになれて己おのれに悔くひぞなし悔くひなきことを悔くひ
いよといふか

小夜床こよどに入りつつ思おもふおのが身みの明日あすはあれ
 ども口くち惜やしきかなや

冬ふゆさると地つちに風かぜ生あれ眞まつさをに天あまの戸と高たかく吹ふ
 き拂はらひたり(風の富士、十首)

風かぜをいたみ雲くももといまりかねにけむ今日けふのみ
 空そらの澄すみたるかなや

ちちのみの秩ちか父ちちの山やまも甲か斐ひが嶺ねもかぎろひつ
 づき風かぜの疾と渡わたる

富士ふじが根ねを高たかみさやけみ現ま身の寒さむきおもわを
 野のにさらしたり

み冬ふゆ空そらいやすみとほり眞ま白しろの富士ふじの山やまさへ風かぜ
 のなかなり

不二の山けふはひねもす遙々とあらはれをり
て冬の風吹く

空はろに渡りきはまる日のすその不二の高山
見らくしうれしも

天傳ふ入日しづめり富士の山甲斐の山々野に
はろに居つ

野のはての山にゐる雲むらさきに藍に金色に
なりにけるかな

茜さす入日のにほひ高からし白雲朱にそまり
て飛ぶも

白妙の富士の神山うつつにはここの野の上に
あらはれ居るも

夕雲の吹きよるきはみはろばろと正しに見えぬ富士の高根は

風景

武蔵野の豊島の里はいまもかも鄙の長路のつづきけらすや

古もかかりけらしな武藏野は穂芒いたも枯れ
てなびけり

丘の上に空は垂れたり野の洞の水田は水のさ
びさびに見ゆ

眼路のはて地と天とをかぎり生ふる木々はい
まはや葉を落したり

物音の一つもあらず野に來れば微かなるかな
われや動ける

大根引く百姓一人のつるかも動くともなく一
人うごけり

地の上にひとり人ある不恰しさをここに來つ
つも先づ思ふなり

向^{むか}うの樹^き夕^{ゆふ}たりあかくこずゑの上^{うへ}ばつとたち
たる鳥^{とり}の腹^{はら}白^{しろ}し

向^{むか}うの樹^きに一つのつぐみ鳴^ないてけりここの簀^{すい}
にもつぐみゐて啼^なく

竹^{たけ}林^{りん}の奥^{おく}ふかくして鳴^なく鳥^{とり}はわが世^よに一つひ
びくこゑなり

竹^{たけ}林^{りん}に光^{ひかり}さし入^いる方^{かた}見^みればそこに薄^{うす}はそよぎ
ゐるかな

武^む藏^{ざう}野^のの野^の中^{なか}の谷^{たに}のむかうには光^{ひかり}りかぎろふ
森^{もり}つづきたり

茄^{なす}子^す畑^{はたけ}茄^{なす}子^すも枯^かれたり宵^よ月^{げつ}夜^やかゆきかくゆき
さびしきものを

ここの野の大根は白くながながし十つかにあ
まり白く長々し

冬深き野中に生ひしすすしろは太く清しくう
れしかりけり

冬深き眞土ふくらめり清々と丘いちめんの大
根の畑

おのれ世に育つる子ありおもふらく清白のご
とすすしくあらしめ

新居

十一月上院、居を西郊池袋村にトす。空は
清明として高く、野は遠く連山の彼方に曠
けり。嬉しきこと限りなし。

住むらくは何ぞ都にかぎらんや天然のもの熟
るる野はここ

玉はこの道はろばろとつづくかなこの吾家
は野中なりけり

朝いで夕いで見れど飽かぬかも大根葉しげる
ここの野の畑

打日さす都は近しここの野邊かくも長き森さ
はにあり

子と妻を憶ふ歌

或時に

秋更けて雨露しげくなり
にけり衰へつつも生
くるおのれに

ちゝのみの父にはなれて山川を遠くへだつる
兒を思ふなり

立ち歩みいまはするてふ立ちあよむ姿をここ
にうつし見るかな

或時に

妻と子はおのれ生いくると倚よりにけりおのれ生いくるは難かたからざらむ

生いくらくはおのれ稼かせぎてこと足たらぬことを補たぎひやるべかりけり

生いくらくはここに妻つ兒こをよびむかへ團まかにまたく棲すむべかりけり

生いくらくは錢ぜはなくとも心こころより共ともに笑わひてすむべかりけり

野のに遠とほくいてて

妻つと子こをおもふ心こころは足た曳ひのかぎらふ山やまの峰たかねわたりゆく

足^{あし}曳^{びき}の山^{やま}田^だは水^{みづ}のせかれつつあらはに淋^{しみ}しく
なりゐるらむか

其^そ所^こにかも在^ありといふごと在^ありがてぬこと思^{おも}
ひつゝ出^いで來^こしものを

淺^{あさ}茅^ち生^{せい}の小^せ野^ののながめも秋^{あき}更^よけていたくも水^{みづ}
の音^ねのひびくなり

いざやとて出^いでつる秋^{あき}の眺^{ながめ}かなはろに遙^{はろ}かに
山^{やま}は居^ゐたりけり

仲秋獨居

筆を執りつつ

かすかなる熱をからだに感じつつなほも筆と
 る仕事せりけり

妻や兒を遠くやりつつわれの世の苦しきこと
 を忍び生くなり

いつしらす生き古りけらし妻や兒を想ふ心ぞ
 われにありけり

心より見たしと思ふおのれをばいかがおもひ
 て暮し居るやらむ

秋草餘情

秋草の淺むらさきの細花を瓶にいけつゝうれ
しきものを

瓶の中に花おのづから含ごもる蕾をややにひ
らくなりけり

窓邊

少女さび靴音ひくき歩みをもここにし聞けば
なにかさぶしき

ヴァキオロンのむせぶ遠音をききをればあな悲
しもよ妹のおもほゆ

風と樹木

ひそまりて動くともなき木を見ればやがてお
 のおの動くなりけり

さやさやと音こそせざれさやさやと梢を風の
 渡るなりけり

遠の樹は秋の深さをあらはせり眼近きものは
 風に揺れつゝ

吹く風のたえざるものか木の上ははづかに靡
 き葉はゆらぎたり

天雲に吹き入る風のあとみれば屋の上の梢ゆ
 るるなりけり

富

天心てんしんに輪わをかゝるか鶯うは高たかからし明あるからしと見みれど飽あかぬかも

大空おほぞらに一羽ひとさぶしく飛とべるなりしかるがゆるに鶯うはさぶしき

法師ほうし 蟬せみ

一つ來きてつくつく法師ほうしなきにけり聲こゑのほそりてつづかぬかもよ

法師ほうし蟬せみひとなき鳴なきに來きりけり前まへの屋敷やしきの櫳かのこずゑに

秋
日

音羽園寺にて

いでくれば秋のさなかの山門に金剛の力者な
らびたるかな

秋風のあらぶるなかになにかも金剛神はは
だかなるらむ

親心われにもありや鳩みれば子にぞ見せたぐ
不恰しきものを

小石川植物園にて

なによりもここの異國の松の葉に刺されてぢ
つとゐる心か

森閑と物音もなし鳥のこゑ聴けばわが世に鳥
のこゑ満つ

龍の髯なでていまおもふ在り佗ぶるおのが來
し方行末のこと

空見れば日影うつるとあらねども木間を日か
げ移るなりけり

樹にこもり仰ぐみ空は高けれどわづかに見え
て眼にしたしけれ

ものいへばその聲空の奥ふかく無限にひびき
往くかとぞ思ふ

秋深みげにも静かに木のかげはながながと地にうつされにけり

あそこそこに立てる樹の幹樹のこする何といふこと無げぞ不恰しき

草の實

或時に

朝寒みヨブの嘆を知る心われにもあらず湧きにけるかも

或時に

百日紅あかく咲きたりまがなしく假初ならぬ
心なりけり

或時に

或時に二首

少女さびとりてたがねし黒髪のおしけくぞあ
り色のよきものを

酒桶の底に投げられ死にたらば來世は酒をた
うべざらなむ

見^みるも死^しぬべし
錢^{ぜに}ためて錢^{ぜに}につぶされ死^しにたらば來^き世^よは錢^{ぜに}を

朝の野菜畑

朝^{あさ}霧^{きり}のこもりあかるくおほほしき野^のを來^きつる
か^かも廣^{ひろ}き夏^{なつ}野^のを

せ^せいせいと大^{おほ}き黄^き花^{はな}は咲^さきにけりさ霧^{きり}ながる
る唐^{とう}茄^な子^すの畑^{はた}

南^{みな}瓜^な畑^{はた}かぼちやころりと花^{はな}かげに葉^はかげに生^な
ひて蔓^{つる}の長^{なが}しも

く^くきやかに葉^はの上^{のうへ}にいでて大^{おほ}いなる黄^きなる花^{はな}
咲^さけり朝^{あさ}の野^のの畑^{はた}

夕の野菜畑

宵月のあやに色さしここにだにこのもかのも
の草の花ゆるゝ

南瓜畑かぼちやの花のしほむより月の出潮と
なりにけるかな

わが母は今は逝てあらず

ははそばの母はおのれの兒を知らずおのれ世
にさび子をまけ持てぞ

垂乳根の母のありせばわがのみし乳房は兒は
も含みけむものを

母ははに戀こひまなこつぶればおのが妻つまも母ははのおも
 かげしてぞ見みえ來くる

歌集
 曼珠沙華畢

卷末記

本書は私の第四歌集になる。

この集は非常に難産であつた。

1
 初め私は自費出版にしようといふ考へて、この歌集を編輯したのは一昨年の夏であつた。無論私には、それらの出版に要する費用といふものはない。それで或人から用途の一部を借用して一先づ印刷屋の手へ原稿を渡したのである。ところが丁度原稿を印刷屋の手へ渡してそれがまだ組版にならない二三ヶ月の程に紙や工賃が非常な

勢いで昂騰したのである。私の豫算はがらりと變つた。それで一先づ出版を中止した。

すると、或地方の某君が、地方では戦前通り工賃が安いから、紙型にこさへるだけでも地方でしたらどうかとすゝめられたので、その氣になつて原稿を送つたのである。そして、その原稿は今に至るまで再び私の手にかへつて來ないのである。

私の最初の原稿と、今爰に出版する『曼珠沙華』の原稿とは多少違つてゐる。最初の原稿には大分私の朱が入つてゐる。この歌集はほとんど作つた時のまゝで、三四首をのこすの外は全く朱が入つてゐない。また最初の原稿は私の歌の全部が入つてゐる筈だが、この集には少々抜けてゐる。既に散佚してわからなかつたからである。

新様に三年越してやつとこの歌集を出すことが出來たのである。私は今ほつとして息をついた。

この歌集は大正七年から八年一杯の歌を集めたのであるから、現在の私から見れば、歌の上に大分距離がある。それは主にどういふ點にあるかといふと、まだどうも艶があり過ぎることである。私は随分樂に歌を作る方であるが、この集にはまだ少々苦勞をしすぎてゐるやうで（これには色々な観方があるだらうが）、變に歌が小まぢやく、く、れてゐて厭なのである。もつと自然に悠々と歌が出て來なくてはいけない。もつとこの附艶がとれて、本統のいゝ素地が出て來なくては駄目だ。

下巻は、以前『さき草集』といふ題で出したパンフレットの歌であ

4
る。このパンフレットは誰も知らない。それで闇から闇へ埋らすのも可愛相だと思つて、この集の後へつけたのである。何分大正四五年の作で、私がまだ廿七才位ゐる感傷家であつた時代であるから、實は恥かしいのである。青い空を見て涙を流す位ゐる雅味があり過ぎて自分ながら困るのである。しかし、時は過ぎた。

私は、兎にも角にも若干づゝ生長してゆくことを信ずる。私の生長はまだ止らない。それだから昨日の満足は今日の満足ではない。今日の満足は明日の満足ではない。この歌集は既に今日のものではない。だが、しかしこれは私の物である。この歌集の個々の歌は、よかれ悪しかれ自分の物になり切つてゐると信ずる。

世の批評家及び鑑賞家の前に、私自身を提供する。そしてどうぞ

御存分にといふ心持から、これだけのことを書き付けて置く。

田端にて

大正十年六月

尾山篤二郎

大正十年九月五日印刷
大正十年九月十日發行

〔定價金貳圓參拾錢〕

曼珠沙華奧附



著者 尾山篤二郎

發行者 西村辰五郎

印刷者 根本惣三郎

東京市日本橋區檜物町九番地

東京市芝區愛宕下町二丁目四番地

發行所

東京市日本橋區檜物町九番地
振替口座東京五六一四番

東雲堂書店

電話本局一八七一番

257
1005

終

